

「女性は産む機械」と言った、柳沢厚生労働大臣の罷免(ひめん)を求めます

「ご近所のみなさん。日本共産党です。」

二〇〇七年度の通常国会が始まりました。柳沢厚生労働大臣が、女性の人格と尊厳を否定する重大発言をしたことが、大問題になっています。今日は、この問題を中心に、お話したいと思います。しばらくのご協力をよろしくお願いいたします。

みなさん。

問題の発言は、柳沢厚生労働大臣が、島根県の松江市で行った、講演の中で言ったものです。報道によれば、大臣は、「少子化」問題にふれて、「十五歳から五十歳の女性の数は決まっている。産む機械、装置の数は決まっているから、あとは一人頭でがんばってもらわなければならない」と言いました。

女性のことを、「産む機械」などというのは、女性の人格も尊厳も否定した暴言です。女性は機械ではありません。自分らしく、人間らしく、精一杯生きたいと、誰もが願っています。もちろん、結婚する人もいるし、しない人もいます。子どもを産む人もいるし、産まない人もいます。産めない人もいます。それぞれの生き方を尊重するのが、人権と民主主義を尊重する社会のあり方ではないでしょうか。このことを理解しないで、多くの女性たちを傷つけ、蔑んだ(さげすんだ)柳沢氏は、大臣としてはふさわしくない人です。任命した安倍首相が、責任をとって、やめさせるのが当然です。

とりわけ、みなさん。重大なのは、柳沢厚生労働大臣が、「少子化」対策を担当する大臣だということです。

問題発言のなかで、柳沢氏は、「産む機械、装置の数は決まっているから、あとは一人頭でがんばってもらわなければならない」と言いました。まるで、子どもの数が増えないのは、女性たちが悪い、産まないからだ、女性が頑張れば子どもは増えると、責め立てているようです。女性が生涯に産む子どもの数——合計特殊出生率(しゅっしょうりつ)が、1・26という過去最低の水準にまで下がったのは、何故なのか、政治の責任を問うべきではないでしょうか。

「二人目の子どもがほしいけれど、残業続きの夫の助けなしで、私だけで育児をしていく自信がない」という声や、「夫から夏のボーナスが出ないと聞かされて、経済的な不安を感じて、二人目を産むのは無理だと確信しました」という声に、政治は応えるべきではないでしょうか。

みなさん。

日本共産党は、安心して子どもを産み、育てられる社会にするために、家族生活と両立できるような働き方ができるように、また、家計が安定するようにと、力をつくして頑張っています。

「カロー死」まで生む長時間労働、なかでも賃金不払いのただ働きの一掃をめざした取り組みで、二〇〇一年以来、不払い分八百五十二億円を支払わせることができました。今度の国会では、大企業・財界がねらっている、ホワイトカラー労働者から労働時間の規制をなくして、残業代を奪う、「ホワイトカラー・エグゼンプション」の導入を、キツパリとやめさせるために頑張っています。

「派遣」や「偽装請負」など、若い人たちの、不安定な働き方や、違法な働かされ方も、結婚や出産を遠のけ、「少子化」の原因になっています。雇用の分野の「構造改革」・規制緩和を推進してきた、自民・公明はもとより、民主党の責任が問われるのではないのでしょうか。

人間らしく働ける労働のルールの確立なくして、「少子化」の克服はありえません。

みなさん。

日本共産党は、子ども医療費無料化措置の年齢を引き上げ、窓口払いをなくすなど、子育ての経済的な負担を軽くするために、みなさんと力を合わせて頑張っています。

「少子化」を招いた自民党政治の責任こそ重大です。それを棚にあげて、女性を責め立てる柳沢氏が、厚生労働大臣にふさわしくないのは、明らかです。総理は、かばいだてすることなく、ただちに罷免するべきです。詳しくは、「しんぶん赤旗」を読んでいただくことをお願いして、お話を終わります。ご協力、ありがとうございます。